

◆障害学生の修学支援・II◆

第一〇回 ノートテイカーの謝金

筑波技術大学教授 石田久之

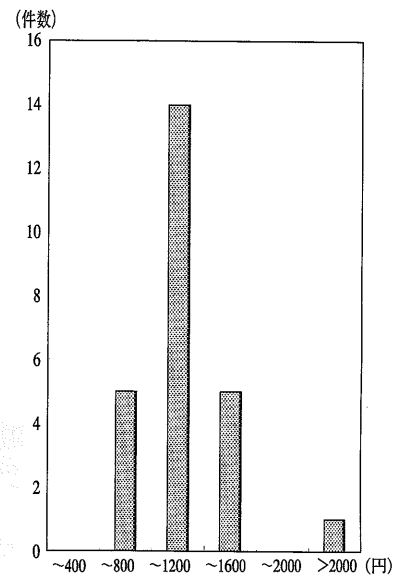
一コマ当たりの金額

さて、今回はノートテイカーの謝金についてみてみましょう。図に示した棒グラフは、私が訪問してお聞きした二五の大学で、一人のテイカーに一コマ(八〇〜九〇分)当たりの謝金として支払われている金額です。通常一授業に二人を配置するため、倍の経費が必要になります。

このようにまとめてみて驚いたのは、大学により、かなりの違いがあるということです。八〇〇円以下から二〇〇〇円を超す大学まで様々です。勿論、ここで言いたいのは、謝金は高いほうがよい、というようなことではなくて、謝金一つ決めるにも、大学それぞれのいろいろな考え方が反映されているということです。とは言うものの、実際いくら必要なか、という面からも大きな問題ですので、まずは、このグラフを解釈してみましょう。

一見して明らかですが、八〇〇〜一二〇〇円の謝金が最

図 ノートテイカーの謝金



も多く、全体の半数を超えています。更にこの内訳をよく見ると八〇〇円台が一大学、九〇〇円台が四大学、一〇〇〇円台が七大学、一一〇〇円台が二大学と、一〇〇〇円が中心となっています。また、一六〇〇円までで全体の九割以上となっています。これらを考えると、謝金の平均は一〇〇〇円ほど(二五大学の平均値は、一〇六七円です)で、範囲は六〇〇〜一五〇〇円が大勢ということになります。

例えば、二人の聴覚障害学生がいて、それぞれ別々の一〇の通年の授業にノートテイクを付けてほしいという希望があるとすると、二名×一〇授業×三〇回(年間授業数)×二名(一授業のテイカー数)×一〇〇〇円となり、年間二二〇万円が必要という計算になります。

ところで、このように書いてしまうと、「うちも他と一緒に二〇〇〇円に(あるいは、もう少し安く九〇〇円くらいに)しよう」というように安易に決められてしまうのでは、と、ちよつと心配なんです。もう少し説明します。

技能に対する対価

今述べてきた謝金は、学部の支援学生についての謝金です。大学によつては院生も支援スタッフに加わっています。また、卒業して社会人となり働いている方や、外部の支援センターからのスタッフもいます。そのような方々には多少割増しがあるようです。院生・卒業生で数割増し、外部センターには倍の謝金という大学もあります。院生ですと経験は豊富です。社会人の場合、忙しい中をわざわざ来てもらうわけです。外部センターのスタッフは高い技能を持っています。それぞれに理由があるわけですが、それらほどの程度考慮するかは、大学の考え方によります。

また、支援の内容により、謝金の額が違う場合もあります。例えば、ノートテイクとPCテイクです。後者の情報量はかなり多いわけですが、それはPCへの高速入力という高い技能に支えられているからです。そしてその理由から、謝金も多くなります。技能に対する対価という考え方ができますが、これらについても、どの程度の割増しかは、

大学によります。支援は大学の独自性でと、いつも書いていますが、謝金一つとっても、それぞれの大学の考え方が、如実にでてきます。

なお、謝金の多くは現金で支払われますが、図書券を渡している大学もあります。前号に書きましたが、謝金を要らないという学生もいます。そのような学生でも、図書券であれば比較的「抵抗感」が小さいのではないのでしょうか。また、謝金はそぐわないという大学もあります。でも、図書券によるお礼ならば、ということだと思えます。

一大学一団体制で

ところで、こんな問題もあります。支援が学部単位で行われている場合や、複数のキャンパスがあり、それぞれで独立して支援が行われている場合、同じ支援内容であっても、謝金の額が異なることがあります。同じ支援をして、何で違うの、と支援学生が思っても、何の不思議もありません。同じ額にすればよいのですが、では、どこに落ち着かせるか。少ないほうに合わせれば、多いほうの不満が残るかもしれません。と言つて、大学としては、あまり大きな出費にしたくない。なかなか難しい問題です。このようなことから、全学で統一した考え方と体制により、支援が行われる必要があります。